

イネ墨黒穂病の発生の特徴

古川農業試験場

1 取り上げた理由

イネ墨黒穂病は、平成14年度にササニシキやひとめぼれで多発したが、収穫後の着色粒の混入による落等被害はササニシキが中心であった。一方、平成15年の多発では、ササニシキを中心に発生し、品種間差が認められたが、収穫物での落等被害は少なかった。これらの要因について、ほ場における発生特徴や接種試験に関する結果を、再多発時のための参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 接種試験では「ササニシキ」と「ひとめぼれ」の間に明瞭な品種間差は認められず、また、接種温度が低い程、発病は抑制される(図1)。
- 2) 冷害年では、不稔割合が高い品種で発生しやすく(図2)、また、同一品種では多肥栽培ほど多発傾向にあることから(図3)、冷害年の品種間差は稲体窒素濃度が関与していると推察される。
- 3) 接種試験では、出穂が進行するにつれ上位枝梗での発病が減少することから(図4)、本病は出穂後の開花期頃に感染していると推察され、茎葉散布剤による散布適期もこの時期と考えられる。

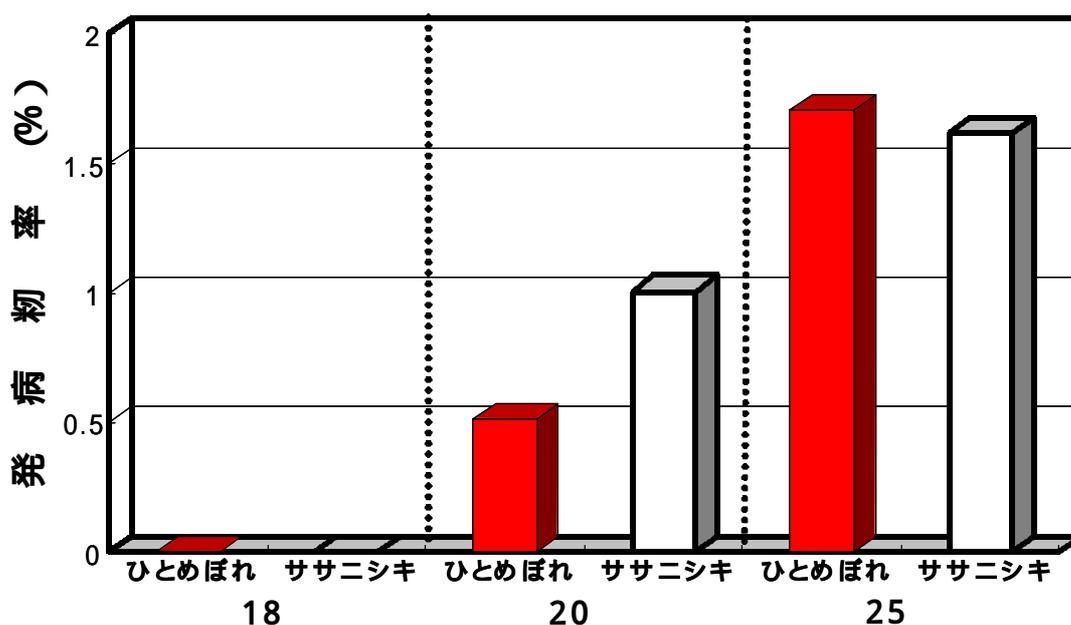


図1 接種温度および品種の違いによる墨黒穂病の発生状況 (平成16年)

注) 1/5000aポット試験。1区 3反復。接種は、開花時に出穂時期が同等の穂を対照に分生孢子県濁液を噴霧接種し、上記の温度の接種箱に24時間保持しその後、25人工気象室内で発病を促した。

3 利活用の留意点

- 1) 収穫物での品種間差には、籾水分や肌ズレ発生の品種間差が関与していると考えられる。
- 2) フェリムゾン・フサライド水和剤(1,000倍液 150ℓ/10a)で防除を実施する場合は、開花期頃が散布適期と考えられる。

(問い合わせ先: 古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新農薬による病害防除試験，発生予察技術支援対策事業：平成14～16年

2) 参考データ

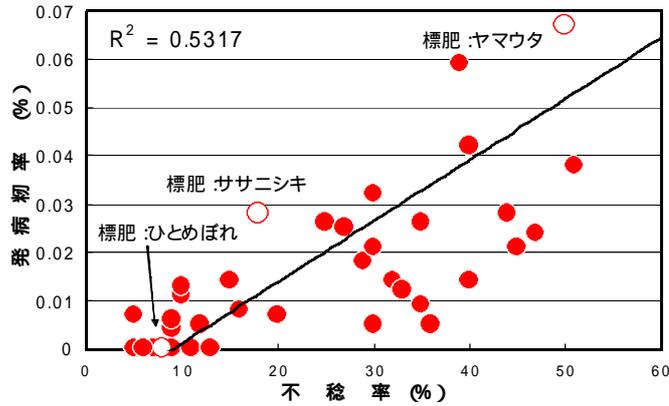


図2 墨黒穂病の発生と不稔率との関係 (平成15年)

注) は奨励品種決定ほの1品種を表す。

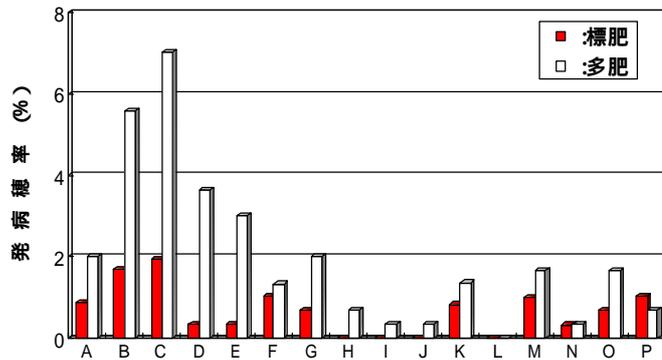


図3 品種別施肥量の違いによる墨黒穂病発生状況 (平成15年)

注) アルファベットは，奨励品種決定ほの品種を表す。
標肥区 : 5kg/ 10a 多肥区 : 7kg/ 10a

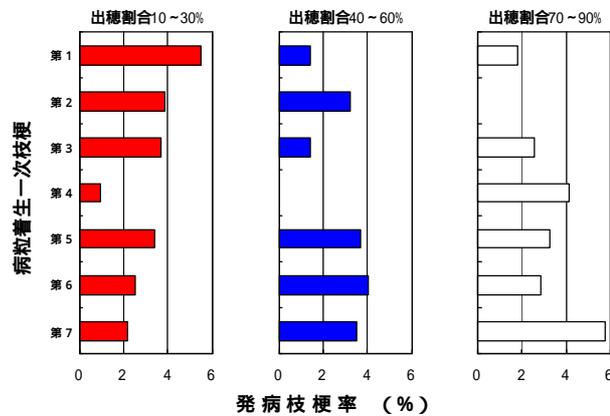


図4 接種時の出穂程度別墨黒穂病の発生状況 (平成15年)

接種は8月18日、20日、21日、27日、19日に行い、ハンドスプレーにより1穂当たり分生子懸濁液10mlを噴霧し、その後、ハロン紙で覆い湿度を保った。調査は上位7枝梗について行った。

3) 発表論文等

特になし